港工同窓会ニュース

第2号　平成15年4月20日発行　発行責任者　前田武男

定時制卒業式・閉課程式典及び「愛宕を惜しむ会」を終えて

東京都立港工業高等学校長　小山　実

本校は都立の高輪工業高校を前身として、麻布工業高校、渋谷工業高校の三つの工業学校が統合されて誕生し、機械課、電気課、電気通信課から多くの有為な卒業生を社会に送り出して参りました。その間、都心部の狭い高等小学校の転用の校舎から、隣接地の買収、実習棟の増築などを行い、歴史と伝統を積み重ねてきました。

しかし、施設・設備の老朽化や都民の高校教育に対する期待に応えるため、平成14年度は定時制課程が閉課程、平成15年度は全日制課程も閉校となり、平成16年度に大田区に単位制の工業高校として生まれ変わることになりました。

3月8日（土）卒業式・閉課程式典が港区教育長をはじめ、東京都教育庁からも多数ご来賓をお迎えし、関係者のご臨席の下で盛大に挙行することができました。これもひとえに同窓会をはじめ関係各位のご理解とご協力があってこそと感謝申し上げます。

閉課程式典には、140名余りの方々のご出席のもとに、厳粛に行われ、式典後には、本校卒業生でありますホーチキ（株）取締役社長の岡田榮一様よりご講演をいただきました。自らの体験を踏まえ、卒業生のはなむけの言葉になりました。

式典終了後の「愛宕を惜しむ会」―定時制お別れ会―では、会場をホテル「メルパルク東京」に移し、同窓生や旧教職員を交えて130名余りの方々が出席され、昔話に花を咲かせるグループや、久しぶりに会う思い出話に旧交を温めるグループなど盛会のうちに会を閉じました。

栗田吉夫実行委員長（同窓会副会長）の挨拶や村上五雄先生（第10代校長）の来賓祝辞そして、前田武男同窓会長の乾杯、校友の歌の合唱など熱気ある会となりました。

たとえ、本校定時制課程が閉じても、歴代の教職員の方々や卒業生の方々が培われてきた本校の歴史と伝統は、きっと卒業生や新しい学校へ受け継がれるものと思います。

閉課程事業に当たっては、同窓会の方々をはじめ関係各位の絶大なるご支援・ご協力を頂いたことに厚くお礼申し上げます。

閉課程記念誌によせて

港工同窓会会長
前田　武男

名門、東京都立港工業高等学校定時制課程の閉課程にあたり、同窓会を代表して感慨を述べさせていただきます。

平成元年に、諸事情から暫くの期間休眠中であった港工同窓会の再興がなされたとき、二代目会長を拝命いたしましてから14年目になりました。この間、母校の輝かしい歴史的節目の創立五十周年記念行事に参加できましたことを心から光栄に思っております。

私は、終戦の年に都立高輪工業高等学校第一本科に入学して、三校統合で都立麻布工業、渋谷工業から来た仲間たちと学び、昭和22年の校舎移転の際には高輪北町から愛宕町まで歩いて机を運びました。やがて通うようになった都立港工業新制高等学校は、戦争の爪痕が残っている狭い校舎で、港中学校も同居していて、昼も夜も多くの生徒が勉学に努めていました。

分校時代のクラスメートのうち何人もが定時制に進みました。やがて、愚息も港工業高校に進学し、私は、ＰＴＡに微力を捧げ、後援会にも名を連ねるようになりました。

港工同窓会は、都立高校では珍しく全定合同で運営しております。前身校の歴史を省みると遠く明治39年に、市立工業補修夜間学校にルーツをみることができ、港工の定時制は永い伝統の上に成り立っています。港工同窓会の前身校同窓会との一本化に際して、久保田鉦雄初代会長をはじめスタッフに高輪工業第二本科の先輩方の名前が多数みられ、この先輩諸氏の英断が今日なお私どもの全定合同の伝統を継続させているのだと感謝しております。港工業高校定時制は先年50周年を祝ったばかりで、この度残念にも少子化等諸般の事情で閉じられますが、この伝統は、これからも続けます。港工同窓会は不滅です。

愛宕を惜しむ会
―定時制お別れ会―

実行委員長（同窓会副会長）
3期(定) 電気科　栗田　吉夫

お別れ会を終えて

会場を「メルパルク東京」に移して行われましたお別れ会は、１３０余名の参加者と70余名の賛助者のご協力で、愛惜のうちにも華やかな会となりました。厚く御礼申し上げます。

平成13年に和泉校長の下で「第1回実行委員会」が開かれ、14年度には小山校長に引き継がれて実施に向けて進行しました。委員は学校側6名、同窓会側は栗田・西原・堀場の旧・現理事とオブザーバーの藤崎ミヤ子先生（旧職員）の4人です。要項の幾つかを挙げますと

・会の名称は同窓会理事会が提案する
・期日は参加し易い土曜日とする
・案内状の住所確認をする
・出欠は「ＦＡＸ返信」とする
・記念誌はＣＤ―ＲＯＭとする
・申込締切日を早くする

などです。事実上の閉校のため通常と異なる点があります。閉会後の反響では、おおむね受け入れられた様です。ただ年輩者からはＦＡＸやＣＤに不慣れで戸惑ったなどの声も上がりました。なお、「校友の歌」の譜面など貴重な発見もありました。

開宴は、開会宣言、実行委員長挨拶、校長挨拶、来賓の村上五雄元校長の祝辞、同窓会長の乾杯と進み、歓談に入りました。会場は懐かしい顔が大勢揃い、旧交を温める輪が重なり、和やかな雰囲気に溢れました。半ばして、三谷和夫先生（元向島工高長）と浅野理事のスピーチを頂きやがて終盤を迎えます。藤崎先生指揮の合唱は、演壇一杯に旧職員、同窓生が揃い「青葉の笛」「鉄道唱歌」の見事なアカペラ合唱です。次いで堀場氏による「エール」が披露され、その凛とした気が流れます。前後はしましたが、浅野氏指導の「校友の歌」合唱で最後を飾ってもらいました。こうして古き良き時代の港定「和」のパワーを彷彿させて頂きながら、感動のうちに散会となりました。誠に嬉しく有難い思いです。

最後になりましたが、本日まで、全面的に支えて下さいました、桑原教頭を始め現職員の皆様方と同窓会理事の皆様方に心から御礼申し上げます。

第55回 港工祭寄稿 在校の思い出

在校の思い出

2期(全) 機械科卒　高野　陽之助

私達が高輪の校舎から実習所を残して愛宕に移ったのは昭和二十三年の四月と記憶しています。この頃至る所に戦災の跡も残っており愛宕山から新橋駅や浜松町駅に電車が停車し、走り去る光景が実に良く見えました。

当時の校舎には、煙突が有りこれに登って景観を楽しむ者などが現れいろいろと、話題には事欠かない当時でした。確か学校祭は昭和二十四年が第一回のように記憶しています。その時校庭でさつま芋（農林一号）をドラム缶に薪を燃やして茹でて、配った思い出があります。

港工高同窓会の思い出

4期(全) 電気科卒　羽根　高広

「○○君はどうした？」「三越に入ったまま出てきません」一同爆笑！教室内で国鉄の下山総裁失踪事件に擬えた冗談だ。当時、この事件の他、松川、三鷹事件など次々に起こり物情騒然としていた。しかし我々は世情を劇画化する余裕があった。勉強はともかく、時代への適応力はあったと思う。個性豊かなユニークな先生達に囲まれて、世相はまだ諸事混沌とした時代だから画一的な教育ではなかった。今思えばこれが幸いした。

工業高校でありながら私のようにあらぬ方向に進んだ者も結構いる。楽しい思い出だ。

在校の思い出

6期(全) 電力科卒　栗原　真平

私どもが通学していた時代には、愛宕山の上にラジオ電波発信用のアンテナが未だ見られました。トランジスタさえ開発されていない時、そう半世紀も前のことです。文化祭の時カラーテレビの試作品をみました。確か水槽の中を泳ぐ赤い金魚が映し出されていましたが、その美しさには度肝を抜かれました。

卒業式のアトラクションとして講堂で三遊亭圓歌師匠の落語を聞かせて戴きました。お伴として歌奴（現・・三遊亭円歌）が来ていた事を妙に覚えています。

四十四歳の高校生

49期(定) 電気科卒　糠信　富子

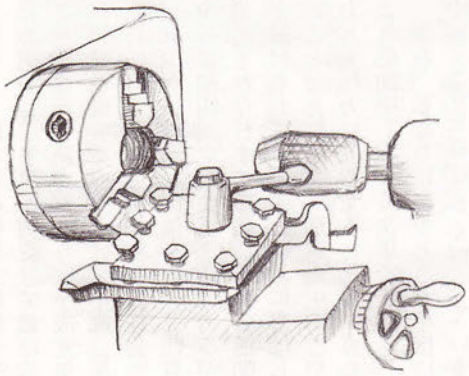
私は四十四歳で定時制高校に入学し四年で卒業し、四十八歳で東洋大学に入学することができました。

多くの先生方の御指導によるものでしたが、大学に行きたいと思う気持ちの中に「なぜ定時制の先生はあんなにやさしいのだろう」と、若い時には、感じることができなかった思いを持ち、大学入学時より教師になりたいという夢にむかって努力し、母校の港工業高校の定時制課程で教育実習を受けることができました。30年以上看護師の仕事をして来て、母校で教わったことは、「教えることは自らが学ぶこと」と実感しました。

港工祭に参加して

PTA会長　片岡美智子

私が学生だった頃とは少し違った文化祭に、時の流れを感じながらも、子供と共に大成功を祈りつつ参加できる事に感謝致しております。



同窓会・回想と述懐（その2）

顧問　高輪7期（全）　高橋　光春

順調にいっていた同窓会も名簿整備の面では戦争、疎開、戦災による家屋の焼失等で卒業生の消息を確認することが困難で、高輪工業の第一、第二本科の名簿はかなり整備されていたが、麻布工業の名簿は三月十日の東京大空襲で学校が焼失してしまっていたので、唯一焼失を免れた卒業台帳から一人一人の名簿を掘り起こしていくといった苦労がありました。

それからの名簿に港工業卒業生の分を加えて不確実ながらも港工同窓会の名簿として発刊することが出来ました。

体裁は、素人の字で書いた謄写印刷のもので決して良い出来のものではなかったが財政的には当時としては精一杯でした。

さて、曲がりなりにも総会をはじめ同窓会活動を続けてきましたが昭和四十年代初めから同窓会にとって決定的な打撃ともなる悪条件が次々と起こってきました。

まず、総会会場としていた講堂兼体操場が校舎改築により使用できなくなり校舎外に総会場を求めることは財政的にむりでした。

つぎには、法改正による住居表示の変更です。同窓会名簿に記載されている住所が全面的に変更になってしまったことは、総会通知は勿論のこと会員への連絡がとれなくなってしまったのです。母校の番地も愛宕町から西新橋三丁目に変わりました。

殊に、会員の多い大田区、品川区などの地区の住居表示変更は数年に亘り昭和四十五年まで続きました。

さらに、追い討ちをかける様に郵便葉書の値上がりです。それまで葉書一枚二十円であったのが昭和五十一年から四十円になり通信費が倍額になってしまいました。

そんな悪条件が重なり同窓会活動にとっては致命的な打撃でした。そんなわけで、昭和四十年から同窓会総会を開催することが出来なくなってしまったのです。

それでも、毎年全日制・定時制の卒業生を新会員として迎えるわけですから同窓会活動を止めるわけにもゆかず、できる範囲で継続していかなければなりません。当時同窓会の終身会費は五百円で年間の収入は約十数万円でした。

そこで、卒業年度からさかのぼって五期分の会員名簿を作成して卒業時に渡す。また、年一回「同窓会だより」として母校の文化祭の連絡や教職員移動などの内容を記した葉書を名簿同様五期分を校内幹事が原稿、宛名はがきを分担して会員に送ることにしました。

同窓会活動を正常な状態に戻すには何としても活動資金を蓄積しなければとの思いから、活動を最小限に抑えて財産蓄積に努めて参りました。

私は昭和六十三年定年退職することになり、同窓会の仕事を加藤先生にお願いし、先生が引受けて戴けることを快く承諾くださり、平成元年に再建準備会を立ち上げ、平成二年三月に「港工同窓会再建臨時総会」がサンケイ会館で開催され、二代目会長に前田武男氏（港3期電力）が選出され今日まで順調に同窓会活動が続けられていることは誠に喜ばしいことであります。加藤先生のご努力と実行力に敬服するとともに衷心より感謝申し上げる次第です。

現在、私なりに多少ともお手伝いできるのを喜ばしく思っています。

完

◇平成15年度定期総会

今年度の定期総会は、左記のとおり開催いたします。懐かしい母校を会場とする総会も本年度までとなります。どうぞ校友お誘い合わせの上奮ってご参加されるようご案内申し上げます。

記

日時　平成15年6月7日(土)13時より

場所　総　会　港工高　1階食堂　13：00～
　　懇親会　芝パークホテル　14：30～

（幹事の方は12時にお集まり下さい）

会費　10、000円（新会員の方は無料です）

総会の内容　事業・決算報告、新役員の承認
　　事業計画・予算案の承認　その他

※準備の都合上、5月末日までに、同封はがきに必要事項を記入の上ご返送ください。尚、会場の都合で第一土曜日になりましたのでご注意下さい。

TEL 03（3433）4141

定時制の生徒会誌記録

～校報から会報へ～（昭和27年創刊）

校友の歌

一、東京港に　飛ぶ鷗
寄せては返す　波がしら
潮のゆくへ　目に追へば
あした長沙の　岸あらふ
港に集ひ　来る船に
月もまどろむ　愛宕山

二、汚濁の中に　澄む光
求めむとては　来りけり
万世の下　太平の
久遠の平和　憧れて
行く手にゑがく　我が思想
選ぶは何れ　愛と真

三、春咲く花の　たちかへり
玲瓏　月の　冴ゆる丘
その古りし日を　偲びては
麓に築く　我が母校
健児一千　自治の名に
向ふは一路　学と徳

四、友のうれひは　我がうれひ
我喜べば　友も笑む
人世の華　青春の
片身をわかつ　君と我
胸の高鳴り　数へては
友情の野辺　行かむ哉

（初代校長・早坂朝太郎先生作詞
校歌と並んで愛唱された応援歌）

平成六年度 東京都教育委員会
―定時制・通信制高校生の生活体験発表会―
わが青春の記録

人生の途中で

49期(定) 電気科 2年 糠信 富子

私は今、45歳の高校生2年生です。長男は専門学校の2年生で、次男は、高3、家では、私が一番下級生です。今日は、こんなオバさんがなぜ今さら高校生なのか、そのことをお話ししていこうと思います。

私の父は、私の幼い頃から長い入院生活を送っていたので、姉、私、弟、それに病気の父をかかえた母の苦労は、並大抵のものではありませんでした。それは、貧乏な生活でした。ですから、姉弟3人が高校に進学するなど、思いもよりません。姉も中卒で働きにで、私も学費のかからない准看護婦学校に進み、その後自分で高校に行こうと思いました。17歳で卒業して、故郷の岡山で看護婦をしながら定時制にかよったり、埼玉の病院に勤めながら通信制に入ったりしましたが、結局続きませんでした。家庭の事情や仕事の都合、理由は色々ありましたが、最大の理由は、私自身が若く弱かったことだと思います。ただ、高校は2度失敗しましたが、一人前の看護婦になりたいという気持ちは強く、東京に出て、現在も勤めている病院で働きながら高等看護学校に通い、正看護婦になることは出来ました。

ちょうど、看護学校の学生だった頃、こんな私も恋をしました。彼は入院患者でした。看護婦として患者さんに接していれば、その人の人柄というか人間性が見えてきてしまいます。彼の入院中の態度を見て、いい人だと思いました。彼も父親を早く亡くし、母親の苦労する姿を見て育っただけに、考え方にも共感が持て、そんなところにも惹かれました。

23歳で看護学校を卒業。晴れて正看となり、同じ年に彼と結婚しました。そして2人の息子にも恵まれ、約20年の間、平凡ではあっても幸せな家庭を築いてきました。また、その間、職場でもいい上司、同僚に支えられて、充実した日々を送っていました。

そんな私が、平成2年8月に退職することになりました。理由は皮肉にも夫の入院でした。病名は「脳腫瘍」。手術に望みを託しましたが、その結果、悪性だとわかりました。約1年の命だろうといわれました。20年以上勤務した病院に今度は癌患者の妻として詰めることになったのです。私の母は私が自分と同じ苦労をする、といって泣きました。息子達には、その年の暮れに本当の病名を告げました。夫は気づいていたかどうかわかりませんが、それからは家庭全員での闘病生活でした。

夫は平成4年1月末に死去しました。

私は、その年の3月から、職場に復帰させていただいております。

夫が亡くなった時、長男は高3で次男が、中3、2人とも受験を控えた時期でした。特に長男は、夫の臨終から葬儀と、ほとんど不眠不休で、その翌日が大学受験などというありさまです。しかも、年齢的にも立場的にも、プレッシャーや迷いを感じていたのでしょう。不本意なかたちで浪人することになりました。逆に次男は、無理といわれた高校を、「お父さんに、お兄ちゃんと同じ高校に行くと約束したから」と受験してなんとか合格しました。そんなこんなで、一周忌を済ませ、長男の進路が決定するまでは、私の心も落ち着かず、あっという間に時がたっていきました。

平成5年の4月に、長男が自分の考えで大学ではなく専門学校に入学することになり、その頃になると、私もようやく、これからのことを考えるだけの余裕ができました。

そんな時、改めて自分が1人になるということを意識しました。息子たちが自立したら、夫と2人で生きていくつもりだったのが、1人でいきていかなくてはならない。将来、息子達の足手まといにならないように生きていくためには、今からしっかり未来を見つめて、自分を豊かにしていくしかない、と強く思いました。

そんな思いが募り出した時、区の広報誌で定時制高校の募集を知りました。夫の看護で退職するまで、私は柄にもなく管理職をしておりました。その時、学歴がないのはまだしも、学力、知識のなさを嫌というほど実感しました。中身を充実するには、まず高校に行

こうと思いました。電気科を選んだのは、看護婦が電気をしることによって、より現代医学に適応した、医療や看護が可能だと考えたからです。看護婦としての経験だけではなく、夫の闘病経験からも、痛切に感じていたものです。

こうして、3度目の正直でオバさん高校生が誕生したのですけれど、25年のブランクは大変で、特に数学などは手も足も出せないし、体育の時間は文字通り青息吐息です。でも、優しい先生方と、息子のような同級生に励まされ、さらに意外にも、同じ年の同級生もいらして、2人して若いパワーに圧倒されながらも、楽しい学校生活を送っています。また、息子たちも応援してくれています。やはり家族はありがたいと思わずにはいられません。

私は母親として「学校生活には遅刻してもいきなさい」と、常々いっているのですが、ある日仕事から帰ると、次男が熱を出して寝ています。私は母親として、学校を休んで息子の世話をしようと思いました。夕食を作り、次男が食べ終わって、ちょうど7時頃、これから私が食事というところに長男が帰宅しました。

「母さん、もう僕が帰ってきたんだから、学校にいってもいいよ。」といいます。この時、私は心の中で「あっ」と叫んで、そのあとの言葉が続きません。考えてみれば、長男も学生、次男も私も高校生、「遅刻しても学校に行く」のは3人とも同じことです。でも、一本とられたと思う以上に、息子がこんなことを言ってくれるようになったかと感無量です。「親はなくとも、子は育つ」ではありませんが、父親が他界し、母親がご覧の通りこんな風なのに、立派に成長してくれている。彼らは彼らで確実に親離れしている。私も子離れしなければ。その第一歩のためにも、高校卒業という目標に向かって、頑張ろうと思いました。また、学校生活を送る以上は、安易に学校を休むものではない、と戒めの言葉にもなりました。息子達に負けてはいられません。

私はこの発表のタイトルを「人生の途中で」にしました。今、言葉に出してみても、大袈裟ではづかしくなるようなタイトルです。でも、私は今日ここで、過去の経緯だけをお話するつもりではないのです。確かに、夫を失ったことは大きな痛手でした。夫を恨む気持ちがない、といえば嘘になります。でも、夫の闘病の様子を思い出すと、どうにもなりません。夫のことを考えれば考えるほど、これからの私の限りある人生を、精一杯大切に生きなければいけないと思うのです。夫は45歳で人生を終えました。その分も私は生きようと思います。「人生の途中」にいられる歓びをかみしめながら。後悔はしたくありません。私自身、今日の発表をステップにして、悔いのない未来を切り拓きたいと思います。

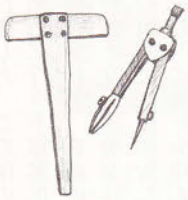
（東京都振興会賞を受賞されました　―編集子）

追　憶

旧職員　富田　幸雄

定時制が本年限りで閉課程となることを知り驚いています。私は昭和18年9月に麻布工業学校の全日制機械科教師として就職し、昭和37年3月に港工高校定時制を退職しました。この間18年7ヶ月でしたが、その中の約13年間は定時制の機械科および数学の教師として過ごさせて戴きました。その後は大学教師として定年まで勤務しました。

港工高での勤務は私の青壮年時代に当たり充実した楽しい日々でした。この頃は戦後のこととて食糧難でしたが、全国民一体となり祖国復興のため懸命に働きました。当時、定時制への志願者は多く入学試験も厳しく行われておりました。生徒諸君の中には復員帰国して若い教師より高年令の人もいましたが、彼等は若い人達の模範となって極めて熱心に勉強しました。また生徒諸君の中には家庭の貧しい人もおりました。或る時担任の生徒の父親が亡くなったので焼香に行きましたが、小さな蜜柑箱を机として夜遅くまで勉強している様子を知り涙を禁じ得ませんでした。今日の豊かな日本はこのような人々の努力の賜物であることをつくづくと感じております。この頃の先生方は教育にも、自身の勉学研究にも熱心で全日制、定時制合わせて10名近い先生方が大学教師として赴任して行きました。生徒諸君も優秀な人が多く、将に港工高の黄金時代ではなかったかと思います。過ぎ去った港工高定時制時代を追憶して閉課程を心より残念に思っています。



カナダからの便り

5期(定)　機械科卒　矢島　延顕

「光陰矢のごとし」卒業以来四十余年が過ぎ、今日、閉校の通知を受け、一抹の寂しさと共にかつて過ごした級友達との学園生活が思い出されます。

私共の十代は、重産業中心から電気、機械等を中心とした製造業へとシフトする過渡期にあたり当校も社会要請を担い、多くの技術者を世に送り出し、日本経済の発展に貢献して来た事と思っております。

教室では担任の曽布川先生より、〝知は力なり、知を力となせ〟との尊い訓話を賜り、その後の人生の指針とし過ごしてまいりました。

一方勉学以外では山岳部に籍を置き、行動を通じて心身鍛錬、精神高揚等得難い経験を通して、未知の世界を知り一段と視野を広げるのに役立ったように思います。

その後のカナダの移住計画も前記のような経過に依る所が多く、三十余年の外国生活が続いております。

カナダは平和で安全のためか世界の観光客から人気のようで毎年多くの人々が訪れており、移住関係でも昔は白人主義から現在では東洋人にシフトしているのが現状のようです。

当初の移住では言語、習慣、気候や人種差別等、覚悟はしていたものの現実は厳しいものでした。特に就職に於いては技術者と言えども、景気は気候などにも左右され、不安定な時期が長く続きました。

その中で結婚、二人の子供の教育方針、仕事の安定化等、外国で生活するが故の問題も間々ありましたが、一つ一つクリアーしてまいりました。

カナダの自然は雄大でドライブ、キャンプ、スキーなどスケールの大きな行動に適しており、山岳部にいた経験を生かし充分楽しむことが出来ました。子供達と五大湖のキャンピング、森林ハイクなど忘れ難い思い出です。

新天地を求め、世界から集まるカナダは三十年前より、一層人種の国際化が進み、そこからのコンセンサスが長い目で見ると、充分国際社会の理解と平和の役に立つのではないかと思っています。

今冬は例年になく寒さが厳しく、動きがにぶっておりましたが、週末には妻と二人オンタリオ湖畔を散策し、若き日の思い出を語り、又高血圧の解消にと励んでいる昨今です。

振り返ってみますと、特に他国にあっては健康が第一の資本です。先輩諸氏におかれましても充分健康に留意され、ますますのご健闘を祈ります。

生徒会活動と会報

14期(定)　機械科卒　安江　弘吉

昭和33年入学の私達は、機械科A組・B組2クラスの各45名の生徒数でした。当時の入試競争率は、3・5倍の難関を突破し入校しました。

入学式の日に担任の曽布川亘先生から初心を忘れずに、「切磋琢磨」し4年間の学業を完成するようにと激励されました。この頃の日本経済は戦後復興の力強い伸び10%強程の高成長率を示し世界の注目を浴びつつ、産業構造の変化は軽工業から重工業へ発展途上の変換の時期でもありました。一方この年の社会世相とし、世界初の海底トンネル「関門国道トンネル」の開通。1万円札の発行、東京タワーの完成等がありました。

貧乏学生の小生は月額2千円の奨学金を受け月謝750円と修学費にこの制度は経済面で大変に助かりました。ちなみに当時の国鉄山手線の初乗り運賃は10円で給料は6千円でした。程なく級友とも親しくなり充実の勤労学生となりました。

入学から二年目の3学期が始まってまもなく最上級生の生徒会会長の通念が突然3年生に替わりました。我がクラスから堀場君が生徒会会長に選出され彼の要望で生徒会運営の総務部を引き受けました。この部の活動内容は年度始めに行う予算案作成と生徒総会開催の進行役、事前の予算案審議は体育部・文化部等全体で20名の各部との折衝に大変苦労し年間予算枠120万円に何とか抑える事が出来ました。総務部のもう一つの活動内容は会報の発行です。

昭和27年に定時制生徒会の〝校報〟の創刊号が発行され第4号より〝会報〟に名称が変わり、以降平成5年まで実に42年もの永い間、生徒会の活動記録等が継続されていた事実を直近に知りました。私は10周年号の担当で、特集として座談会「編集の思い出」を企画しました。

出席者は顧問の曽布川先生に創刊号責任者の白井守夫氏、2号の村井源治氏、4号の青山一郎氏、7号の柴崎寿宏氏に前任者の野口英司氏と多数の先輩を囲んで石炭ストーブ(だるまストーブ)で暖をとりながらの懇談の一時は、生涯忘れる事のない楽しい思い出の一つです。

冬山の幸運

15期（定）　機械科卒　木村　智佑

昭和34年に入学し昭和38年に卒業しましたが、この4年間は私の青春時代の中でもとりわけ思い出深いものでした。私は中学を卒業し就職した会社が1年間養成所で勉強させてくれた関係で年齢的には1年遅れて入学しました。入学式の帰りに新橋烏森のキャバレーに制服のまま学生割引で誘い込まれたのが忘れられません。

教室は石炭のだるまストーブで、昼間部の人が水をいれて消した後はなかなか火がつかないで苦労した事や、規則的には結構うるさい先生方も静かに寝ている生徒には決して文句は言わなかった（中には鼾をかいている者もいた）事など懐かしい思い出です。

私は元々山が好きだった関係で入学直後から山岳部に入部しました。最初は高校の山岳部なのでハイキング程度かと思っていましたが入部してみると、そうそうたる先輩達が部を取り仕切っており、そのレベルの高さに驚きました。新人部員はまず丹沢や奥秩父の、ボッカ訓練から始まり2年目には沢登りやロッククライミングの訓練に入りました。

毎日夜8時に授業が終わると部室の前に集合し、学校の裏山の愛宕山の急階段を何回となく登り降りして足を鍛えたり、学校の屋上からザイルを垂らして、懸垂下降の練習をしたり、今思うと翌日の厳しい仕事を考えればとても若くなければ出来ない事でした。

3年目からは冬山にも挑戦しました。さすがに担当の先生も心配して「事故だけは起こさないでくれやな、俺首になるから。」と言っていましたが。そんな事にはお構いなく冬用テントなど買えない時代ですから、夏用テントもシュラフも全てアメ横の米軍放出の物を背負って、意気揚揚と八ヶ岳や谷川岳に行ったものです。夜、買ったばかりのシュラフに入って横になってみると顔の所に黒い染みがあり後で皆で米軍が朝鮮戦争で死んだ兵士をアメリカに運んだ時のものじゃないか、と噂しあったものです。

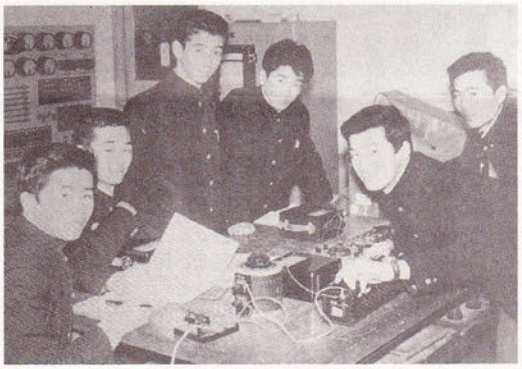
このような、山岳部生活の中で特に思い出に残る事件がありました。それは昭和37年の3月、1年先輩をリーダーに同期の者と3人で早春の後立山連峰鹿島槍東尾根に無謀にも挑戦したときの事です。例によって夏用テントと放出シュラフなど40キロを超えるキスリイグを背負いワカンジキでラッセルしながら東尾根の森林限界にテントを張り翌日ザイルをかついで鹿島槍を登頂しました。その日は1日快晴に恵まれ先行隊のトレースもしっかりついており、意外に簡単にアタックする事ができました。少し山を知っている人ならお判りと思いますが、早春とはいえ厳冬期に近いそれもバリエーションルートである東尾根を18～19歳の高校生が簡単に登れるものではありません。怖いもの知らずとはよく言ったものです。しかもその後がいけません。すっかりリラックスしてしまった我々は下山する前の1日を休養日としゃれ込み、テントの横の急斜面でピッケルを使いグリセードの練習をしていました。そのとき、同期の1人が誤って転倒しそのまま雪の急斜面を滑落していってしまいました。途中何回か斜面でバウンドしながらみるみる小さくなって落ちていくのを見てリーダーの先輩と二人青くなってしまいました。おそらく400～500メートルも落ちたので死んだか良くても重傷だと話ながらリーダーが助けに降り、私は3人で持ち上げた荷物を下に降ろす事にしました。結論は同期の者は悪運強く顔をかなり雪渓にこすってやられたけれど、骨折する事もなく麓の鹿島部落で治療を受けていました。

その時、我々無謀な高校生を親切に助けてくれたのが、後で知った事ですが有名な「鹿島のオババ」さんで冬の鹿島槍に入る登山者は皆このオババ宅によって山の状況を聞いて行くとの事でした。このオババ宅に治療も兼ねて1晩泊めていただき、翌日御礼を言って帰ろうとすると「若いのに怪我をして大変だったね、これで山を嫌いにならずまた来ておくれ。」と言って当時の500円札をそっと握らせてくれました。中卒初任給がまだ6000円ぐらいの時、金額は別としてもこの温かさに感激し、その後機会を作ってはこの鹿島部落のオババを訪ね楽しんだものです。オババはその後20年ぐらいで亡くなりましたが、今でも鹿島部落を思い出すたびにオババの温かい笑顔が懐かしくなり、私の貴重な人生の思い出となっています。

今の日本が忘れ去ってしまった財産が私達の過去には沢山あったような気がします。貧しくとも元気だったあの頃を思い出しつつ、卒業生の皆様のご多幸をお祈りもうしあげます。

生徒総会（昭和36年）

製図室（昭和37年）



電気実習室（昭和43年）

弁論大会（昭和43年）

新入生歓迎会（昭和58年）

給食室（昭和63年）

★…母校最後の文化祭のご案内…☆

在校生諸君の活動の成果をご高覧下さい。
また、校舎内外の見学と合わせご案内申し上げます。

港工祭　11月 9 日（日）

※同窓会ブースを用意します。是非ともお立ち寄り下さい。

第55回港工祭校庭（平成14年）

—58年の歴史を閉じる—

★閉校式典の予定★

日程　平成16年 3 月 6 日（土）
場所　第56回 卒業式 於 本校
　　閉校式　　於 本校
　　お別れ会　　於 芝パークホテル

＊同窓会も協力します

案内状は、会員のうち住所判明者全員に送る予定。その他の方もぜひご参加を！

新設校について

母校は平成16年に「単位制工業高校」として生まれ変わる。

先に発表された、都立高校改革推進計画によって母校港工業全日制と定時制は、羽田高定時制、鮫洲工業定時制、羽田工業定時制と共に発展的に統合され、全定併置の単位制工業高校として、平成16年に生まれ変わるための準備に入っている。

新設校は、平成15年 1 月現在まだ正式に名前は決まっていない。場所は大田区東六郷 2 丁目18番 2 号（京浜急行雑色駅下車）の第一製パンの工場跡地であり、第一京浜に面している。

学校の規模は、全日制18学級、定時制12学級。設置学科は、

全日制　機械工学科／自動車工学科／電気工学科／プロダクトデザイン科
定時制　普通科／生産工学科

です。

平成14年度に校舎の建設が開始され、平成16年 3 月に完成、 4 月開校です。

構造は、鉄筋コンクリート造 5 階建てで、校内に同窓会の場所（共用スペース）も用意される見込みです。

◇母校教職員の異動

平成15年4月

転出（全日制）

相川　英昭（教頭・科学技術大）
森田　吉広（数学・九段高）
松井　寛（数学・小平高）
中村　哲（物理・清瀬高）
井上　芳明（保体・竹台高）
十亀　有紀（英語・竹早高）
鈴木　義里（国語・狛江高）
佐々木京子（家庭・農芸高）
富山　健治（工業・足立工）
沢田　正義（工業・向島工）
林　潤一（工業・足立工）
篠田　智久（工業・荒川工）
猪口　明（工業・退職）

（定時制）

桑原　洋（教頭・港工全日制）
小笠原博綜（世界史・工芸高）
清水　隆夫（数学・八潮高）
宮川　正司（工業・向島工）
川崎　雅己（工業・荒川工）
早坂　利光（工業・本所工）
真下　正之（工業・荒川工）
藤川　孝（工業・総合技術センター）
向原　敬騎（保体・第四商）
小川　薫（養護・退職）
廣瀬セイ子（司書・退職）
佐藤　勝三（嘱託・退職）
直井　功子（主任・八潮高）
桑原　洋（教頭・港工定時制）
矢本　純子（英語・戸山高）
大塚　健一（工業・世田谷工）
鈴木　貴裕（工業・世田谷泉高）

転入（全日制）

◇事務局からお知らせ

〈会則改定による賛助金の納入状況〉

昨年の総会案内に振込用紙を同封し、初めての賛助金納入方式を実施しました。卒業後5年経過会員の内、住所判明者約4500名に発送したところ、823名の賛同者から送金及び励まし文を戴きました。おかげさまで今回のニュースは12ページに拡大し、多くの原稿を記載することが出来ました。

平成16年3月に最後の卒業生を迎え、入会金を徴収した後は収入が絶えることになり、今後の港工同窓会の維持は賛助金に頼らざるを得ません。会員各位のご理解とご賛同をお願い申し上げます。

○会員数の把握状況について

	区分	在籍数	住所判明（死亡）
正会員	高輪1本	771	105(61)
	高輪2本	768	59(67)
	麻布1本	485	190(90)
	港・定	3,867	684(44)
	港・全	9,684	4,287(135)
	計	15,575	5,325(397)
特別会員	現職員	44	44
	旧校長	14	8(6)
	旧職員	587	333(93)
	計	645	385(99)

※港工同窓会があることをご存知無い方が多数います。クラス会等の住所資料を連絡下さい。

○同窓会の収支状況について

平成14年3月繰越額		1,923,677.-
14年度収入の部		3,155,481.-
入会金	600,000.-	
賛助金	1,621,190.-	
その他	934,291.-	
14年度支出の部		3,155,481.-
卒業生名簿	257,250.-	
総会費	675,395.-	
通信費	596,825.-	
広報費	97,125.-	
その他	227,695.-	
繰入額	1,301,191.-	
平成15年3月繰越額		3,224,868.-

☆同窓会会務の連絡先について

校内理事（OBの先生）不在のため、名簿の質問、住所変更等のご連絡は、下記へお願いします。

記

〒278-0036　千葉県野田市中野台鹿島町23-7
㈱クリーンジャパン内
松　岡　信　之
（会計理事　港16期 S39. A卒）
TEL 04－7125－6808　FAX 04－7125－6851
E-mail : matsuoka@cleanjapan.net

編集後記

東京湾に飛ぶ鷗
寄せては返す
波がしら
潮のゆくへ・・・・・・。

初代校長の早坂朝太郎先生作詞の校友の歌の一節です。

大空を自由に飛ぶかもめのように4年間の勤労学生生活を修了し、卒業できた喜びの日。

大変に多くの事を学び遊んだ母校も本年3月8日をもって定時制の閉課程そして、来年は全日制の閉校です。

港工同窓会ニュース第2号も小山実学校長をはじめ多数の方のご協力とご支援のお陰で発行できました。特にご多忙のなか同窓生のご寄稿および報道写真の提供ありがとうございました。紙面に限りがある為すべて記載することが出来なかった事深くお詫びいたします。

6期（全）　龍　健治
22期（全）　町山　茂
14期（定）　安江弘吉

編集子一同